



文京区立第九中学校 三年 小出 奈菜

「受け継ぎ、伝えていくもの」

警視庁が発表している『道路の交通に関する統計』

(平成二十九年度)によると、自転車事故というのは、一日に二〇〇件も起っているそうだ。また、東京都が平成二十五年に三〇〇〇人を対象に行ったアンケート『雨の日に自転車でケガした、またはケガしそうになった経験があるか』では、約八〇〇人の方々が「はい」と答えているそうだ。

こうした統計といったものは、いろいろな機会で見にすることはあるが、自分がそこに含まれていない限りは、ほとんどの人は「他人事」として捉えるのではないだろうか。そして、当然ながら、私も「他人事」と感じる一人であった。あるとき、自転車で想定外のケガをするまでは…。

や、歩行者にぶつかるなどの事故にはいたらなかった。ただ、それでも、右ひじを地面に打ち付けたことで、すり傷による出血が、そのとき起こった。

突然の横転で、そして、ひじからの出血で、パニック状態になって、その場で座っている私の横を、一人のサラリーマンらしき男性が無言で通り過ぎていく。その後ろ姿を横目に、立ち上がるうとしたとき、「大丈夫？ どうぞ。」と優しい声と共に、ポケットティッシュが私の前に差し出された。

見上げると、中年の女性の方が、私の顔を心配そうにのぞき込んでいた。その目は、私への同情と、私のケガへの心配と、私を落ち着かせようとする優しささに満ちていたことを、今も私はハッキリと記憶している。

私が、立ち上がり、「ありがとうございます。」と答え、ケガをしたのが、ひじのすり傷だけと分かったためか、その女性の顔からは、心配や不安といった表情が消え、私を優しく包み込むような笑顔が浮かんでいた。

「良かった。大きなケガとかではなくて、でも雨の日は気を付けてね」とその女性は言い残し、私の元を去っていった。

その女性の後ろ姿を感謝の気持ちで見送りながら、ふ

あるとき。私は、急ぐ心を胸に抱えながら、塾へと向

かう道のりを、自転車で走っていた。心の中では「もう少し余裕を持って家を出ればよかったのに！」という後悔と、自分を責める気持ちが混在していた。そんな余裕を失っていた心理状態だったからか、普段ならば塾へと向かう道は、道路が広いので、ゆっくり歩道を注意して走るのが、そのときは、走る必要のない車道を走っていた。そして、塾へ遅れてはいけないという急ぐ気持ちからか、ブレーキを中途半端にかけながら、車道から歩道へ戻ろうとしたとき、小さな段差でタイヤをとられ、私は、横転してしまった。

結論から先に言えば、ものすごくスピードが出ていたわけではなかったのですが、打撲や骨折といった大きなケガと、以前に聞いた私の母の言葉を思い出していた。「誰かに優しくされた人は、その優しさを、今度は別の人に伝えることができるのよ」という言葉である。

そのとき、私は、母のこの言葉の意味を、心の底から理解できたと実感した。

つまり、「優しさ」というのは、人から人へリレーしていくのだと。目には見えないバトンがしっかりと、ある人から別の人へと受け継がれていくのだと。あるとき、私に声をかけて心配してくれた女性は、今までに他の人から多くの優しさを受けていたのではないだろうか。そして、その分だけ、人に優しくなれるのだ。心の余裕が優しさを育むのだ。

ということは。その「優しさのバトン」は、今、私の手の中にあるのだ。今すぐに、このバトンを渡す機会は来ないかも知れないが、そのときは、必ずやってくるはずだ。私は「そのとき」を決して見過ごさないよう、あの女性から引き継いだこのバトンを、しっかりと、別のまだ見ぬ人に渡していきたい。そして、強く思う。「優しさのバトン」を通じて、人と人がつながっていく、そんな心温まる東京という街に、私は住み続けていきたい。



みんなをつなげるお菓子

今までに私はたくさんの人と出会ってきました。例えば、私が小学五年生のときに出会ったベトナムと日本のハーフの子はとても面白く友好的で、誰とでも仲良くになれるような人でした。人の良いところを見つけるのがうまい男の子とも出会い、今でも仲良くしています。地域のお菓子教室で出会った大人の方々は、テキパキとしていて、まじめです。みんなそれぞれ違う背景や考えがあります。もちろん私にもあります。

私はインドネシアで生まれ、五歳のときに日本の大阪に来ました。そして、十一歳のときに東京に引っ越してきました。日本では、たくさん友達できました。私の友だちとカラオケに行くことがとても好きです。つながりの輪はどんどん広がっていきました。しかし、国の

違いを理由に、嫌なことをされて悲しく思ったり、大阪の方言が東京では伝わらなくて少し恥ずかしい気持ちになったりすることもありました。文化の違いは、時として人と人の壁になることがあります。

私はそんな文化の違いを、人と人とのつながりのきっかけにしたいと思いました。そのために、私はお菓子教室を開こうと答えました。その理由は三つあります。

一つ目の理由は、甘くて美味しいお菓子を一緒に作って食べることで笑顔になれるからです。私は地域のお菓子作り教室に通っていますが、参加者はみんな大人です。しかし、一緒にお菓子を作って食べたりお話しをしたりして楽しむ中で、皆さんと仲良くなることができました。お菓子を作る楽しさ、お菓子の美味しさは人を幸

せで温かい気持ちにします。そんな気持ちで協力してお菓子を作るから、みんなが仲良くなれると思います。

二つ目の理由は、お菓子作りは言葉が違って一緒にすることができずからです。会話をすると、相手のことをたくさん知ることができずすが、言葉が違っても会話をすることは難しいです。しかし、お菓子作りは言葉が伝わらなくても一緒に活動することができ、さらに協力してお菓子を作る中でコミュニケーションをとることができます。私に通っている料理教室では、言葉を使わずでもお菓子作りを通して会話ができます。

三つ目の理由は、お菓子を通して違う文化を知ることができるからです。世界には場所ごとにそれぞれ特色のあるお菓子が作られ、食べられています。伝統的なお菓子として昔から親しまれているお菓子もあります。例えば、日本には練りきりや団子があります。宮城県ではずんだもち、沖縄県ではサーターアンダギーなど、地域ごとに特色があります。他にも、私の生まれたインドネシアではクエプトゥというお菓子が親しまれています。クエプトゥは、ちくわのような形をしていて緑色をした焼き菓子です。パンダンという緑色の植物と、米粉、パ

ムシュガー、削ったココナッツなどを混ぜて作ります。違う国や地域のお菓子を知ること、その場所や関係する人々のことを知るきっかけになります。知らない人でも、その人のことを知るきっかけになります。知らない人でも、その人のルーツとなる場所のお菓子を一緒に作ることで、相手のことを理解して仲良くなれると思います。

私は将来パティシエールになりたいです。たくさん勉強して、経験を積んで、いつか世界のお菓子教室を開きたいです。私のお菓子教室では違う国や地域、様々な文化のお菓子を作りたいです。参加者は大人や子ども、日本の人や外国の人、誰であっても歓迎します。そして、みんなでお菓子を作ることでつながりの輪を広げていきたいです。



明治大学付属中野八王子中学校

三年

長谷 真悠

多種多様を生かせる社会を目指して

「何か困ったことあったら言ってね!」

これは私が友達に言われて一番安心する言葉である。味方がいてくれるんだと思えるからだ。人は一人では生きていけず、周囲の人達と常に関わり合って生きていかなければならない。どの場でも誰かと関わり、支え合っている。

私はたくさん関わり方がある中で、誰かと話しているときが一番心を通わせている、つながっていると感じる時間であり、その時間がとても好きだ。特によく人に相談されることが多い。誰かに何かを話すよりも聞く方が好きなので、相談してくれている人の支えになりたいと思うし、私の一言でその人の気持ちが明るくなればいいなと思いつつ話すように心がけている。これは私の

友達がかけてくれた一言がきっかけでこう考えるようになった。

小さなことで気が落ち込むことがよくある私は何でも相談し合える友達に相談することがある。彼女は私よりもポジティブで、その場で解決することができなかったとしても聞いてくれるだけで明るくなれる。話を聞いてもらった後、最後に彼女は私に

「また何か困ったことあったら言ってね! いつでも聞くとよ!」
と言ってくれた。

私の考え方とは異なる彼女なりの考え方もある中で、私の気持ちや立場を踏まえながら親身になって私の相談内容と一緒に向き合ってくれた彼女に、私はこれ以上無

いような安心感や友達の温かさを覚えた。彼女にとってさりげない一言だったのかもしれないが、私の気持ちはもやもやしていたものが晴れ、とても嬉しくなった。

今までの私なら相談されたときにここまでの安心感を与えることができなかったと思う。ところがこの経験をきっかけに、たとえ言葉でなくてもこの一言に代わる何かで誰かに安心を与えられるようになりたいと思った。相談してくれている人の気持ちや立場を考えながら、そして尊重しながら話を聞くことが大切だということとを彼女から学ぶことができた。

これからの社会はネットを介してなどの方法も含め、多種多様な人達が様々な方法を利用してつながりを持ち、お互いに支え合いながら生きていく時代になっていくだろう。そういったつながりを積極的に築き上げ、つながりの輪を広げるために私達ができることは何だろうか。最も大切なことは、お互いに相手の「普通」を理解することだと私は考える。気持ちや立場を理解し合い、自分の中で「普通」と思う考え方を相手に押し付けずに関わっていくことができれば、お互いの長所を最大限生かすことができ、逆にお互いの短所は共存していく上で長

所へ変えることも可能になってくると思う。こうしてつながりの輪を広げること、現代社会よりも更に輝きを増した希望に溢れる社会を創ることができるのではないだろうか。

社会は様々な人がいる。顔や肌の色などの外見だけでなく、価値観やものの考え方は人それぞれだ。だからこそお互いの「普通」を理解すべきだし、それを助け合ったり支え合いに変換することで新しい未来の景色が見えてくると思う。私はそのような美しい社会を創っていくため、そしてやがてそれが実現することを信じて相手のことを理解する、認める、尊重する努力をしていく。これからの社会の先頭を担う一員として。





多摩市立諏訪中学校 二年 西川 実花

暑くて、熱くて、厚い

会話を控え、距離を保つこと。なお一層の手洗いと消毒。基本はステイホーム。私の日常も大きく変化した。人と会うのも制限されるようになった。自由に、そしてにぎやかに、人と対面で会話ができないのは寂しい。そういう意味では、人とのつながりが減ったように感じられる。しかし、それは本当だろうか。

ある夏の暑い日、私はワクチンを打つため、母と共に接種会場へ向かっていた。たった数分歩いただけで汗が噴き出してきた。ワクチン接種後には、習い事へ行く予定があった。だから私は、早く家へ帰りたいという気持ちでいっぱいだった。駅から会場へはシャトルバスに乗る。既に、バスは目の前に停まっていた。やっと涼しくなると心の中で喜んでいた。すると、ちょうどそこへお

ばあさんがやってきた。母に、「〇〇駅行のバスはどこですか」と尋ねてきた。接種後の帰りだそう。シャトルバスには乗れたが、その後の乗り継ぎ方が分からなくなってしまったという。私達は普段バスに乗らず、分からなかった。バス案内を見て、乗り場は判明した。私はてっきり乗り場の番号を教えたら、涼しいバスの中に入れると思っていた。だが、その期待は母の言葉で潰れた。「ご案内しますよ。」と言ったのだ。私は驚いた。バス乗り場を教えれば、駅に辿り着ける。ここまですればもう十分だと思っていた。考えていると、二人は前をゆくり歩いていった。仕方なく、私は二人についていくことにした。乗り場に着くと、母は熱心にバスの到着時間を調べ、同じく〇〇駅へ向かう人を探していた。また、そ

の人に事情を話し、おばあさんの乗り降りを〇〇駅まで見守って欲しいとお願いした。その方は温厚な方で、笑顔で「分かりました。」と答えてくれた。その様子に母はほっとしていた。こうして時が過ぎ、次のシャトルバスへようやく乗ることができた。そのバスの中で私は一人、その出来事について考えた。まるで、ソフトクリームミックス味の様だった。パニラとチョコがぐるぐる。と私の心を複雑にした。

会話をする、一緒にいる、遊ぶだけでなく、母の様に誰かのために動くのも人とのつながりだと思ふ。コロナウイルスの影響で気軽に外出ができない。その外出中、突然助けを求められても、すぐ対応できるだろうか。今回の私は自分の都合を優先してしまった。

私に足りないもの、それは必要なときにさっと動ける優しさだ。誰にでも優しさはある。だが、それを私のように日頃から使うのが難しい人も大勢いる。思っているだけでは伝わらない。東京には人が密集している。楽しいもので溢れ、笑顔で幸せそうに過ごしている人は沢山いる。逆に、困っている人も沢山いる。気付けないのは心の片隅で、自分ではない誰かが面倒な事を引き受けられ

ばいいと思っているからだ。だから、多くの人は街中で困っている人に気付いても通り過ぎていくのだろう。人のために行動する勇氣も足りず、自分の周りを心のアンテナを張り見えていないからだ。一方、母や駅まで送ってくれた方には、その勇氣と心のアンテナが張り巡らされている。人のために動くという気持ちを普段から温められる。それは、毎日の感謝を行動に乗せているように感じられる。決して一定の特別な人にしかできないことではない。自分に強さがあれば、私達中学生でも全ての人にできることなのだ。

コロナ禍で周りの人のために行動することは難しい。だが、この出来事で学んだことがある。どんな時代でも手助けや親切は、人とのつながりを深めるということ。明日はどんなことが待ち受けているかは分からない。誰かの心に寄り添えているだろうか。もしかすると、明日もどこかで誰かが、暑くて熱くて厚い思いをしているかもしれない。東京では毎日、皆の心のアンテナがピンと張っている。そして東京に住む人も、訪れた人も、思いやりと優しさで溢れる街だと感じられるようにしたい。一言ありがとうと笑顔だけで人とつながれる。



国立市立国立第一中学校 一年

宮原 渚月奈

あのとときの二週間

私は今年、中学一年生になった。一学期が終わり、夏休み中の私は課題の多さに圧倒されている。一学期を振り返って、今思うことはたくさんある。そうやって思い出を振り返ると、いつも人と人とのつながりの大切さに気づく。

六月。私たちにとって、大きな一カ月となった。六月の初め。私は新型コロナウイルスに感染した。PCR検査を受け、結果を聞いた瞬間、頭が真っ白になった。月末の期末テストはどうするのか、二週間も休むという事。

家族五人の内、お母さん、私、弟が陽性となって、お父さん、妹と隔離するために私は弟と一緒に九日間程入院することになった。

一日三回、体調チェックをしに来てくれる。どの看護師さんも私と弟の話を優しく聞いてくれたり、勉強のことについてもアドバイスをしてくれたりした。それだけでなく、ご飯を運んでくれ、私たちが食べ終わった物の片付けもする。これは私がこの目で見たことだ。私たちが退院する時はメッセージカードを渡してくれた。私たちが暇にならないよう、ドア越しにミサンガやぬり絵はするかと、いつも笑顔で話しかけてくれる保育士さんもいた。担当してくれたお医者さんも笑顔で話をしてくれた。私たちの面倒を九日間見てくれた、病院の方々に、私はとても感謝している。

そして私たちは無事、退院した。久しぶりの登校の前日の夜、私は今までにない気持ちになった。久しぶりに友達に会える楽しみな気持ち。もう一方は、二週間も学校に行っていない私をどう思っているのかという不安。

私が登校すると、多くの人が声を掛けてくれた。掛けてくれた言葉はすべて温かかった。期末テストも受けることができ、先生や友達にも感謝を伝えることができた。家族にも。

私は、一カ月という期間でたくさんの事を学んだ。人

急に学校に行けなくなるという事で、テスト勉強に絶対に必要な教科書なども、すべて学校のロッカーにあった。入院当日の朝、担任の先生とビデオ電話で話した。入院の事、テスト勉強の事。すると、担任の先生は私が病院へ行く前に、ロッカーや机の中の物を家に届けて行く、と言ってくれた。そして、先生二人で全教科の教科書やノート、ワークなどを家に届けてくれた。実際に、私は先生が届けてくれた勉強道具のおかげで九日間、テスト勉強に取り組むことができたのだ。

私と弟が過ごした九日間は、絶対に忘れない。九日間、弟以外誰とも会えない生活を経験した。しかし、ステキな出会いもあった。それは看護師さんや保育士さん、お医者さんとの出会いだった。看護師さんは、

の優しき、言葉の温かさ。そして何よりも、人と人とのつながりの大切さだ。

私たちに優しくしてくれた、医療従事者の方々は、現在も新型コロナウイルスに感染した人たちのために動いてくれている。その方々に私は感謝を忘れない。そして世界中の人たちにも感謝の気持ちを忘れずにいてほしい。

さらに、自分の周りの人たちにも感謝を忘れてはいけない。一番近くで応援してくれる家族。仲良しな友達。優しい先生。私はこの他の人ともたくさんつながっている。このつながりは、私を助けてくれた。私は人と人とのつながりを大切にし、助けてくれた人にこれからも感謝を伝えようと思う。

みなさんの今までの思い出も、振り返れば人と人とのつながりがあると思う。人の優しきと言葉の温かさにも助けられた人もたくさんいると思う。

だから私は、優しきと温かさを持ち、たくさんの人に感謝される人になりたいと思う。